

千曲川旅情の歌（島崎藤村）

小諸なる古城のほとり

雲白く遊子悲しむ

緑なす繁縷は萌えず

若草も藉くによしなし

白銀の衾の岡辺

日に溶けて淡雪流る

あたたかき光はあれど

野に満る香も知らず

浅くのみ春は霞みて

麦の色わずかに青し

旅人の群はいくつか

畠中の道を急ぎぬ

暮れゆけば浅間も見えず

歌哀し佐久の草笛

千曲川いざよふ波の

岸近き宿にのぼりつ

濁り酒濁れる飲みて

草枕しばし慰む

草枕しばし慰む

解説 「明星」の創刊号（明治

三十三年四月）に「旅情」という題

で発表され、明治三十四年八月刊行

の「落梅集」に「小諸なる古城のほ

とり」という題で収められました。

昭和二年刊の「藤村詩抄」で、「千

曲川旅情の歌」と改められました。

語釈 ※小諸⇨小諸城址。

※遊子⇨藤村自身。 ※繁縷⇨植物。

ナデコ科の越年草。 ※衾⇨寝るとき

にかける夜具のこと。ここでは雪が

積もること。 ※岡辺⇨丘のほとり。

通釈 *小諸城址のほとりで白い雲

を眺め 悲しくたたずむ旅人（藤村）

*新緑のはこべもまだ芽吹いておら

ず、若草もその上に腰を下ろせるほ

どではない。

*白銀の雪が敷き積もる山辺で薄く

積もった雪が陽に溶けて流れてい

く。

*日差しは暖かくなってきたが野に

満ちる香りはない。

*春霞が浅くかかるのみで麦の色は

わずかに青い。

*幾人かの旅人の群れがあせ道を急

ぎ通っていく。

*日が暮れて 浅間山も見えなくな

り、佐久地方の草笛の音が哀しく聞

こえる。

*千曲川に漂う波の岸に近い宿屋に

入り濁り酒を飲み、しばらくの間、

旅愁を慰める